週報
こひつじ
第39巻　29号
大津キリスト教会
菊池郡大津町室 119
TEL 096-293-4470
FAX 096-293-4961
牧師　米村　英二

行なおうとする者は、わかる

その二　生ける神との人格的交流を通して

ではなぜ、安息日についてのパリサイ人たちの解釈は人を苦しめることになったのか。

彼らが安息日という規定だけに目を留め、その背後におられる慈愛に満ちた神を見ようとしなかったからである。

イエスは、律法を、生ける神との人格的交流を通して学ばれた。それに対して、パリサイ人たちは、人格的神からそれを切り離して宗教的戒律にしてしまった。

神から切り離された聖書の言葉はしばしば独善的な思想となって人を糾弾する。

だから、聖書を正しく理解しようと思うなら、まずその著者である天の父がどんな方かを深く味わい、知ることが求められるだろう。それをしないで聖書はわからない。聖書からいのちを得ることもできない。

聖書は、知識としてなら、今ではインターネットによっても学べるだろうが、それだけでは、その著者である神との人格的交流がどうしても欠落しやすい。

私たちはやはりイエスにならうべきである。

イエスの生涯を特徴づけていたのは、父との絶えざる交流だった。

「イエスは、朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた」

とあるように、朝ごとに父と語り、父に聞き、父と喜びを分かち合うのがイエスの習慣だった。

「わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わした方のものです」

とイエスが言われたのは、それほどまでに、イエスと父なる神との人格的交流が密だったということなのだろう。

イエスの教えがいのちに溢れていたのは、そのためだった。

聖書に限らず、学ぶという行為は、ほんらい人を介して行なわれるものではなかったか。

昔の人はいつもそうやってきた。たとえば江戸時代の寺子屋教育だ。その中心は素読で、『論語』などを先生の後につけて読んだ。わからなくても読んだ。それだけで、子どもたちの魂が鍛え上げられていったという。

現代の学校とちがって、そこでは真の人間になることが教育の目的とされていたのである。

教会においても重点を置くべきは、どれだけ聖書を知っているかより、どれだけ聖書によって生きているかのほうだろう。

そこでイエスは言われた。

「だれでも神のみこころを行なおうと願うなら、わかる」

これがイエスによって紹介された、もうひとつの聖書の読み方である。

それは、知ろうとして読むのではなく、行なおうとして読むということだ。

そういう意味では、聖書は実践のための書である。

人生をいかに生きたらよいか。その問いをもって生きる人への指南書であると言ってよい。

聖書は何をもしようとしない人、どこへもゆこうとしない人にはわからない。しかし、

「われらは何をなすべきか」

という問いを持って読むなら、聖書はわかるとイエス自身がおっしゃっているのである。

パウロが回心したとき、彼が最初に言った言葉は、

「主よ、私は何をしたらよいのでしょうか」だった。

フランチェスコも同じ問いを発した。すると、

「壊れた教会を建て直せ」

という声を聞く。そこで彼は、すぐに近くの荒れ果てた教会を見つけ、ひとつひとつ石を積み重ね、その修復に取りかかったとフランチェスコ伝には書かれている。

やがてその小さな行為が、当時腐敗していたカトリック教会を立て直す大きな働きへと彼を導いてゆくのである。（続）

今日の礼拝

○第一礼拝は午前一〇時から、第二礼拝は午前一一時から。

○教会学校は午前一〇時からこひつじ館で。

○説教は岩崎宏志さん。

先週の礼拝

○司会は宮元隆博さん、奏楽は吉岡夫妻。

○説教は米村牧師。申命記七の三から。イスラエルの民が、荒野を出て、約束の地に入ると、彼らはそこで多民族とかかわることになります。すると神は一つのことを彼らにお命じになりました。それは「彼らと互いに縁を結んではならない」というものでした。

彼らと同様、私たちも信仰の異なる人びとの間に住んでいます。私たちはそこでどう生きることが求められているのでしょうか。縁を結ばない、深入りしないとは具体的には何を意味するのかについて、考えてみました。

先週の出席

第一礼拝が三八名、第二が三六名、合計七四名（男二四、女五〇）。子ども六名。合わせて八〇名。

CSキャンプ案内

○日時は七月二九日（土）～三〇日（日）。場所は下益城郡美里町ガーデンプレイス。

牧師身辺

先日オランダのモーレンカンプさんから、次のようなメールが届きました。

＊＊＊

英二さん、悲しい知らせです。ファニーの体調が急に悪化し、七月九日に主のもとに召されました。八七歳でした。数週間前に骨折し、手術をしたあと、回復のため、しばらく介護施設にお世話になっていました。最近の彼女の健康状態は必ずしもよくありませんでした。そんなとき骨折し、手術を余儀なくされ、その後、長く横になっていなければなりませんでしたから、しだいにからだが弱って行ったのだと思います。お別れの式は七月一四日の正午からです。お祈り下さい。

以下はぼくの返事。

＊＊＊

ファニーさんが召されたと聞き、驚いています。最近、ファニーさんの体調はよくないと聞いていましたので、祈っていました。でも、きっと今が神様の時だったのでしょう。これからはさびしくなられますね。

もうあれから五年になるでしょうか。真紀とスティーブンに声をかけられて、思い切ってオランダにモーレンカンプさんたちをお訪ねしたのは。あのときおふたりにお会いできてほんとうによかったです。礼拝のあと、ぼくたち家族のためにファニーさんがせっせと昼食を準備してくださったことを思い出します。

教会の多くの方がたにとって、ファニーさんは「偉大な母」であったに違いありません。お別れにだれよりもモーレンカンプさんやルツちゃん、デビッド君に神の慰めがあるように祈っています。

＊＊＊

ぼくは二一歳のとき会社をやめて、それから五年間、モーレンカンプ夫妻とともに住み、彼らから伝道者としての訓練を受けました。常に食卓をともにさせていただいていたのですから、ファニーさんの料理にはずいぶんお世話になったことになります。たいへんな犠牲であったと思います。ただ感謝のほかありません。